川柳

青木十九郎
重森恒雄
峯裕見子
選

特選

今夢の途中なんですつるし柿

大藪町　大塚　しのぶ

（評）甘くなる途中の「つるし柿」を見ている作者がいる。作者の夢もかなっていく途中。そしてもう確かな手ごたえを感じているのだろう。干し柿を手にする日は近いようだ。（恒雄）

特選

点滴を続ける中で夢探す

竹ヶ鼻町　小椋　きぬ子

（評）点滴を続けている闘病生活の中での、早く元気になって、あれもしたい、これもしたいという、生きることへの執念とも言える心情が伝わってくる。（十九郎）

特選

未知の野にころがれころがれどんぐりよ

犬上郡甲良町　川口　利江

（評）さまざまな経験を積んで、人生の何たるかが分かってきた人から若い人たちへ贈る声援のような一句。「未知の野」は恐れと同時に夢も内包しているようだ。ひらがなの繰り返しが快いリズムを生んだ。（裕見子）

入選

エクセルは出来ないマージャンは出来る

近江八幡市　浅野　忍

（評）最近のパソコン文明に対するやっかみ。エクセルがなんだ、今どきの若いもんはマージャンも知らんのかとお怒りのようだ。むかしは付合い麻雀、接待麻雀が盛んだった。ちなみに私は両方ともできない。（恒雄）

入選

新しい一歩四月の重い靴

地蔵町　大谷　のり子

（評）学業を終えて、職業人としての一歩が始まる四月。明るい将来を夢見ながらも、仕事、対人関係、生活などへの不安がつきまとうであろう。その心境を「重い靴」で簡潔に言い表した。（十九郎）

入選

昨日から桜が笑いこらえてる

稲里町　覇流　不良者

（評）開花寸前の桜である。それを「笑いをこらえているようだな」と作者は感じたのだ。「昨日から」の具体性が、そのイメージを強調し、ワクワクと春の到来を伝えている。（裕見子）

入選

空っぽの工場内にも春が来る

大藪町　加藤　佑子

（評）誰がなんと言おうと、不景気が続いている。がらんとして誰もいないままの工場に、それでも春が来て、若葉のみどりがみずみずしい。花が咲いている。だから、工場の寂しさがますます浮き上がってしまう。（恒雄）

入選

入学の子たちの羽のやわらかさ

正法寺町　高井　豊

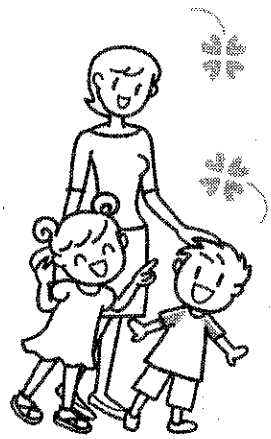
（評）「羽のやわらかさ」によって、小学校の新入生たちの素朴で純真で柔軟性のある生き生きとした姿を映し出した。そして、新入生に対する深い愛情をも感じさせる。（十九郎）

入選

目が覚める見える聞こえる動けます

愛知郡愛荘町　青木郁子

（評）若い頃には、当たり前と思っていたことばかりである。しかしそれは、とてもありがたいことだったのだと作者は感じている。この人の、これからの人生への向き合い方も見えてくるようだ。（裕見子）



佳作

段落をうっかり二階まであがる

平田町　竹内歌子

佳作

日向ぼこ幸せそうな愚痴を聞く

大藪町　是沢　卓

佳作

迷路から抜け出し春をぎゅっと抱く

清崎町　柳本和子

佳作

気がつけば影が二つになっていた

堀町　河分武士

佳作

頼られて優しい花になっている

犬上郡豊郷町　須田さゆり

佳作

待っているだけの幸せだってある

西沼波町　外海芳子

佳作

毛糸玉買って来たのは四年前

大藪町　古川和子

佳作

氏神へ六十段をトントンと

日夏町　寺村保子

佳作　いつも誰かに寄りそって咲いている
八坂町　山本　はるか

佳作　解き放ち妻とゆっくり降りる駅
東近江市　小林　清次郎

佳作　遅くない人生今が弾む時
清崎町　西村　孝子

佳作　おはようさん今日も元気なわたくしへ
松原町　川村　美栄子

佳作　介護して初めてわかる他人の目
肥田町　藤野　佐津子

佳作　老い二人一番風呂と終い風呂
犬上郡多賀町　新谷　清子

佳作　病んでいる物干竿がはしゃぎ出す
城町二丁目　布施　明子

佳作　お供えは自分の好物選って買い
鳥居本町　寺村　美惠

佳作　あるがまま肩を寄せ合う二輪草
須越町　島田　洋子

佳作　ふりむいた景色の中に舞う枯葉
東近江市　知野見　松子

佳作　トンネルを抜けて桜の笑い顔
須越町　疋田　弥栄子

《総　評》

昭和六十二（一九八七）年度に彦根市民文芸作品の選者を初めて務めてから、本年度で連続三十一回の選を担当した私は、その間の応募句の作風の移り変わりを思いつつ選を行った。

入賞作品の中で特に取り上げたいことは、私は作品個別の評では触れなかったが、表現技法としての比喩の使用である。特選の「夢」「つるし柿」「夢」「ころがれ」「どんぐり」、入選の「重い靴」「桜」「笑いこらえてる」「野」「羽のやわらかさ」、佳作の「段落」「二階まであがる」「迷路」「春をぎゅっと抱く」「影」「優しい花」「トントン」「咲いている」「降りる駅」「はしゃぎ出す」「二輪草」「ふりむいた景色」「枯葉」「トンネル」「桜」などはそれである。

このことは、常に比喩の使用を奨励しており、また、平成二十七年度の表彰式の後の市民文芸講座で「比喩について　川柳を例として」と題して講演を行った私にとっては、嬉しいことである。

青　木　十九郎

昨年よりも投句者数、投句数が減りました。川柳だけではないようです。しかし、川柳部門に限れば大した問題でもないようなような佳句が沢山寄せられていて今年投句していただかなかった方たちには、やっぱり川柳はいいな、来年はまた投句しようかと思ってもらえたのではないでしょうか。

愚痴にはなっていないような愚痴を聞く日だまり、ただ待っていることの幸せ、四年間ほったらかしの毛糸、妻と二人だけに解放された駅、病みながらはしゃぐもの、そして、すべてが美しい紅葉となり消えてゆく過去などなど。楽しく読みました。

それでも、ここからのあと一歩の踏み出しをどうすればいいのかと反省もしています。まだ、平凡の範囲を越えていないと思うのです。提出される3句のうち1句は、もっと思い切った省略や、一読分かってはもらえないなと思うような比喩や、これまでのご自分ではないような言葉遣いの句や、破調の句を書いていただけたら面白くなるのではないかと思っています。

ご健吟を期待しています。

重　森　恒　雄

今年も市民文芸の川柳部門に応募をいただき、お礼を申し上げます。一五四句・五十二人の方の作品と向き合いました。

時代は激しく移り変わり、自分たちの暮らしは？　この国の行く末は？　さらには世界の動きは？　と考えることも多くなりました。そんな時に文芸だの川柳だのについて考えるのは、のんきで余計なことでしょうか。

こんな時代だからこそ、私は人の心の不変を思います。

暮らしの中から生まれた実感の一語や一句ほど強いものはないと思っています。人が懸命に生きて、ふと漏らしたようなひとことや、感じたことを大切にして「今日を生きる私」を書いていただきたいのです。豊かな思いや言葉を活かす場として「市民文芸」があり続けるよう願っています。

ただし、あなたの大切な「作品」ですから、文字や表記の正確さに努めてください。辞書を引くことを厭わずにいてください。

来年も、ぜひあなたの川柳をお寄せください。お待ちしています。

峯　裕見子

選者吟

ゆっくりと夫婦の上を流れ星　青　木　十九郎

友達のいうことを聞く冬の河　重　森　恒　雄

釘抜きのありかわからぬ母の家　峯　裕見子

冠句

今井三日月
柴田遊児
西村吟雪
選

特選

心地よく　一日（ひとひ）を満たし恙なく

犬上郡豊郷町　北川泰子

（評）冠句の真髄である生活人情が詠まれていて秀句、それぞれの立場でひと日の業を成し終えて健やかに心身をほぐす、その果てに感謝の気持ちがすばらしい、平和でなごやかな家庭が偲ばれる。

特選

寝つかれず　胸で遊ばす恋一（ひと）つ

清崎町　柳本和子

（評）幾つに成っても老春の男と女、老い木に花夢で逢いたい語りたい、これが性かと惑いつつ、人生黄昏れ赤く灯す。

特選

独り立ち　希望に満（みち）し弾む胸（むね）

彦富町　池田光雄

（評）厳しい時世の中に立ち向かいながら、決して臆することなく種々多彩な夢を胸に、身も心も張り切って旅立つ、若人の爽やかさ溢れる気持ちが快く出ていて、清新な調べがゆるみなくかもし出されている。

入選

心地よく　無言で通じる対湯呑み

後三条町　吉原初美

（評）命を結んで早やうん十年互いに心が解る。きょうもそっと差し出すタイミング、それは互いに絆を結び合う幸せいっぱいの夫婦、ほのかに心暖まる刻にお天道様も微笑み見守る。

入選

寝つかれず　悲しい嘘が身を攻める

新海町　野田美代

（評）誰もが経験した様な話。自分の立場を少しでも有利にする為に軽い気持ちで吐いたひと言が大きな波紋となって周りの人を傷つける。一人になって考えると、あのひと言が自分にのしかかる人間の哀しい性のひとコマ。

入選

独り立ち　もう道草は許されず

新海町　野田惣次郎

（評）社会人として起点に立つ心懐の吐露だろうか。未知の世界に羽ばたいていく教訓だろうか。下五に若人の決意と行動に身も心も自分に対し責任の重さ大切さを暗示した感深い逸句。

入選

心地よく　五感くすぐる花に酔う

田附町　大谷みつ子

（評）春爛漫の桜の下であろうか、何であれ花を愛でていると本当に心が和む。少し位むしゃくしゃしていても自然と穏やかな気持ちになるから不思議。美しく穏やかな一句。